

聖書：マルコの福音書 5：35～43

説教題：恐れずに信じる

日時：2025 年 9 月 7 日（朝拝）

会堂司ヤイロの話は前回から続いています。この章の 22 節で彼はイエス様の足元にひれ伏し、23 節でこう懇願しました。「私の小さい娘が死にかけています。娘が救われて生きられるように、どうかおいでになって、娘の上に手を置いてやってください。」 イエス様はこの願いを聞き入れ、すぐに出発されました。しかしその途中で 12 年間、長血をわずらっていた女の人の話が入ります。ヤイロにとっては一刻を争う状況でした。にもかかわらず、この女性のために時間が取られてしまいます。イエス様は彼女を捜し出し、また彼女と話をされました。もちろん彼女が癒やされたことは素晴らしいことです。けれどもその間にどんどん時間が経過します。ヤイロはどれほどじりじりしていたことでしょうか。

そしてイエス様がまだ彼女に話しておられた時でした。会堂司の家から人々が来て告げます。「お嬢さんは亡くなりました。」 最悪の知らせです。ヤイロはだから「早く来てほしい」と願ったのです。しかしその間に娘は死んでしまいました。ヤイロはあの女性を責めたい気持ちになったかもしれません。あるいはイエス様ご自身を責めなくなったかもしれません。

この記事を読んで似た話を思い起こす方もおられるのではないのでしょうか。それはヨハネの福音書 11 章に記されているラザロの話です。あの時もマルタとマリアはイエス様に早く来ていただきたいと人を遣わしました。しかしイエス様の到着は遅れ、その間にラザロは死んでしまいました。けれどもあの箇所から分かることは、イエス様はあえてそうなさったということです。今日の箇所も同じでしょうか。ヤイロの娘がイエス様の到着前に亡くなるというこの展開は神のご計画によることだったのでしょうか。いずれにせよ、この結果、ヤイロも、ここを読む者も、さらに豊かなメッセージを受け取ることとなります。

イエス様はヤイロに言われました。「恐れなくて、ただ信じていなさい。」 ヤイロはこの時、恐れていました。娘の死の知らせを聞いて、すべての希望が断たれたかのように感じたのでしょうか。しかしイエス様は、恐れるな！と言われます。これは現在

時制で書かれています。今あなたが恐れていることをやめなさい！恐れに屈してはならない！ということです。続けて「ただ信じていなさい」と言われました。こちらも現在時制。信じ続けなさい！ということです。ヤイロはイエス様を信じたからこそ、イエス様のみもとに来ました。しかし状況が変わり、もう終わりだと思い始めていました。家からやって来た人々も「これ以上、先生を煩わすことがあるでしょうか」と言いました。これ以上イエス様に頼っても無駄だと考えたのです。興味深いのは36節の「イエスはその話をそばで聞き」という部分に印が付いていて、欄外に別訳として「無視して」とあることです。つまり「お嬢さんはなくなりました。もう先生に頼っても意味がありません」という人々の声をイエス様は無視して、ヤイロに語りかけられたのです。「その声に惑わされるな！それを退けて、あなたはわたしを信じ続けなさい！恵みに目を留めて、なお信じ続ける道を進みなさい！」　そう語られたのです。

ここにあるチャレンジは、私たちは私たちにとって信じられる範囲内でだけイエス様を信じるのか。状況が変わり、もうこれでは無理だと思ったら信じるのをやめるのか。それともなおイエス様を信じ続けるのか、ということです。ヤイロはここでアブラハムの信仰に倣うようにと招かれたのです。ローマ人への手紙4章18～21節に、アブラハムの信仰がこう記されています。「彼は望み得ない時に望みを抱いて信じ、『あなたの子孫は、このようになる』と言われていたとおり、多くの国民の父となりました。彼は、およそ百歳になり、自分のからだですでに死んでも同然であること、またサラの胎が死んでいることを認めても、その信仰は弱まりませんでした。不信仰になって神の約束を疑うようなことはなく、かえって信仰が強められて、神に栄光を帰し、神には約束したことを実行する力がある、と確信していました。」　私たちも同じです。私たちもイエス様に望みをかけ、頼り、祈ります。しかし状況が変わったら、もう終わりなののでしょうか。自分が「ここまで」と決めたところを超えたら、もう望みはないのでしょうか。そうではない！ということです。その状況に至っても、なお信じ続けなさいとイエス様は招いておられます。「神に頼ってももう意味はない」という周囲の声、あるいは自分の心の中の声を退け、それらは無視して、なおイエス様に望みを置いて従う。その先に人間の思いをはるかに超える神の栄光を私たちは見ることになるのです。

人々の声をいわば無視して、イエス様は前進されます。イエス様はペテロとヤコブ、ヨハネだけを連れて行かれました。この三人を特別に伴う場面は他の箇所にも出て来

ます。会堂司の家に着くと、人々は取り乱し、大声で泣いたり、わめいたりしていました。イエス様は中に入って行き、彼らに「どうして取り乱したり、泣いたりしているのですか。その子は死んだのではありません。眠っているのです」と言われました。もちろん普通の意味ではヤイロの娘は死んでいました。しかしイエス様はこれから彼女を生き返らせるみわざをなさろうとしておられました。ですからその死は一時的であり、眠っているのと同じだと言われたわけです。しかし人々はこれを聞いてあざ笑いました。そんなことは彼らにとってあり得ないことでした。イエス様はそのような者たちを皆、外に出し、子どもの父と母、そして先ほどの3人の弟子たちだけを連れて、その子のいるところへ入って行かれました。そしてまず子どもの手を取ったと書かれています。本来、死人に触れることは汚れた者となることなのに、イエス様は触っても汚れが移ることはありません。むしろイエス様のきよさといのちが子どもの方へ流れて行きます。そしてイエス様は「タリタ、クム」、すなわち「少女よ、起きなさい」と言われました。すると、少女はすぐに起き上がり、歩き始めました。彼女は12歳でした。人々はこれを見て、口もきけないほど驚きます。それは当然です。死人が生き返るなど誰も見たことがないことです。

イエス様はこのことを誰にも知らせないようにと厳しく命じられました。これはこれまでの多くの奇跡においても同様でした。それはまだその時ではないからです。時期尚早だからです。これを伝えるだけでは、人々はイエス様を単なる奇跡の人、癒やしの人としてしか見なくなります。それでは誤ったメシア観が助長されてしまいます。ですからこのような奇跡はイエス様の働き全体との調和の中で正しく理解される必要があるということです。このあとなされる十字架と復活の光の中で捉えられる必要があるのです。それゆえイエス様はこの段階では、まだ語ってはならないと命じられたのです。一方で、イエス様は少女に食べ物を与えるようにとも言われました。ここにもイエス様の深い配慮が現れています。ただ奇跡を行って終わりではありません。その少女が食べる必要があること、その物質的・身体的必要にもイエス様は心を配られました。私たちが毎週礼拝で祈る主の祈りもそうです。私たちに關する祈りの最初に「私たちの日ごとの糧を今日もお与えください」とあります。キリスト教は靈的なことばかりを強調する宗教ではありません。肉体の必要にもこのように心を配ってくださる神の視点がここにも示されています。

以上の箇所から、以下の三つのことを私たちは今朝、心に留めたいと思います。そ

の第一は先に少し詳しく触れましたが、「望み得ない時に望みを抱いて信じ続ける信仰」の必要性についてです。自分が信じられると思える状況で信じることは、それほど難しくありません。しかし本当のチャレンジは、信じ続けることが難しいと思える状況においても、なお信じ続けることです。これこそまさにヤイロに与えられたチャレンジでした。娘の死の知らせを聞いた時、ヤイロは希望が完全に消えたと感じたことでしょう。しかしその時にイエス様は「恐れなくて、ただ信じていなさい」と語られました。これは別の言い方をすれば、「たとえあなたが諦めそうになる状況に至ったとしても、神はあなたを祝福することを諦めてはおられない」ということです。なおここからわたしはあなたを導く。だからわたしに信頼してついて来なさい、と神は語っておられるのです。もし私たちが、もう信じることはできないと思えるような状況でも、なお神に信頼できるなら、私たちに怖いことはなくなります。どんな状況でも神に信頼することができるからです。神はその幸いへと私たちを招いています。神は私たちを様々な試練に合わせられることがあります。しかしその中でなおご自身に信頼し続けるようにと招いておられます。そしてその先に、私たちの思いをはるかに超えた恵みの世界、救いの世界を神は備えていてくださるのです。

二つ目に今日の箇所が私たちに語っているメッセージは、イエス様は死に対してさえ圧倒的な権威を持つ方であるということです。4章35節以降、イエス様が様々な力の上に権威を持つ方であることが連続して記されているとこれまでも繰り返し述べて来ました。4章最後では大自然の上に権威を持つイエス様、5章最初では悪霊（レギオン）の上にも権威を持つイエス様、そして前回の長血の女の記事では、病の上にも権威を持つイエス様、そして今日の箇所では、死の力に対しても権威を持つイエス様であることが示されました。これら自然災害、悪霊の働き、病気、死は、みな人間の罪によってこの世に入り込んだ災いです。私たちは皆こうした力の下で苦しみを覚える存在です。けれどもイエス様はこれら災いすべてから私たちを救い出すことができる方であるということです。とりわけ今日の箇所では、死そのものに対する勝利が示されました。これは旧約の預言者たちも預言して来たことです。たとえばイザヤ書25章7～8節に次のようにあります。「この山の上で、万民の上をおおうべールを、万国の上にかぶさる覆いを取り除き、永久に死を呑み込まれる。神である主は、すべての顔から涙をぬぐい取り、全地の上からご自分の民の恥辱を取り除かれる。主がそう語られたのだ。」 またイザヤ書26章19節：「あなたの死人は生き返り、私の屍は、よみがえります。覚めよ、喜び歌え。土のちりの中にとどまる者よ。まことに、あな

たの露は光の露。地は死者の霊を生き返らせます。」あるいはダニエル書 12 章 2 節：「ちりの大地の中に眠っている者のうち、多くの者が目を覚ます。ある者は永遠のいのちに、ある者は恥辱と、永遠の嫌悪に。」このような旧約時代から約束されて来たことがついにキリストにおいて実現し始めたのです。死は最後の敵であると聖書で言われています。その死に対してさえ圧倒的な権威を持ち、私たちを救い出してください。イエス様です。であるならば、このイエス様により頼む私たちは、この地上で一体何を恐れる必要があるのでしょうか。たとえ死が間近に迫っても、あるいは絶望と思える状況があっても、このイエス様に信頼するところに救いと命があるのです。

そして三つ目に心に留めたいことは、私たちは今日の記事をイエス様の働きの全体像の中で正しく捉える必要があるということです。私たちはこの箇所を読んで「イエス様により頼めば、私も今ここでヤイロの娘のように、死から生き返らせてもらえる」と単純に受け取ってしまうべきではありません。実際、イエス様はこの奇跡の後、人々がそのように短絡的に受け取らないように、「このことを誰にも知らせないように」と言われました。先に申したように、この出来事は後のイエス様の十字架と復活というみわざを通して正しく理解されるべきものだからです。聖なる神が罪ある私たちを救うためには、まず私たちの罪の問題が根本的に解決されなければなりません。イエス様はそんな私たちの罪を身代わりに背負って十字架にかかり、私たちを救うためのすべての代価を払ってくださいました。そしてその代価を完全に支払った方として、死の力を滅ぼし、復活されました。この方により頼む者は、この方を通して罪の呪いから解放され、永遠のいのち、そして神の国の完全な祝福へと生かされるのです。このような光の下で、今日の記事はイエス様が私たちに与えてくださる祝福の先取り、前触れ、その一部の映し出しとしての意味を持っています。言い換えれば今日の箇所ですされたヤイロの娘のこの世への一時的な生き返りよりも、はるかに大いなる祝福が私たちを待っているということです。その最終的な祝福が実現するのは神が定められた最後の日、イエス・キリストの再臨の日です。確かに今はイエス様によって神の国がすでに始まっていますが、その完全な完成はまだ先にあります。ですからこの地上に生きる私たちはなお苦しみを経験し、病を経験し、また死を経験します。ヤイロの娘も今日の箇所生き返らされましたが、やがて再び死を迎えたことでしょう。けれども私たちの希望は、この世で病が治り、この世で死を回避して、この世にとどまり続けること、あるいはこの世に戻って来ることはありません。私たちの本当の望みは、イエス様が備えてくださった完全な神の国に生かされることです。イエス様は

死の上にも権威を持つ方として、たとえ私たちがこの世で死に服しても、今日の箇所のように「あなたに言う、起きなさい」との御声もって、より頼む私たち一人一人を神の国と永遠のいのちに生かしてくださる方です。

このイエス様に目を上げ、従い続けるようにと今日の箇所は私たちを招いています。私たちも絶望を感じることもあるかもしれません。状況が変わり、もうだめだと思う時があるかもしれません。しかし、たとえ私たちが諦めそうになっても、なお私たちの救いを諦めておられないお方がおられます。その方が今日も語っておられるのです。「恐れずに、ただ信じ続けなさい」と。この言葉をいただいて、私たちはなお主を信じ、主に従って歩んで行くことができます。死にさえ打ち勝つ力強い救い主が今日もともにいてくださる——このことを喜び、将来の究極的な救いを確信しながら、この世で経験する様々な困難や悲しみにも、勇気と希望をもって立ち向かって行くことができるのです。